

幕末明治の写真師列伝 第二百一十一回 宮下欽 その三十九

「廿七日 曇

一、午前第八時過、たか博覧会見物に行度旨願出候ニ付、開届ケ遺ス、即時出行、○同第十一時頃浅沼や(屋)手代来り、兼而註文致し置候小台紙千枚代金三百五拾匁之代金三百五拾匁、桃色パビール百枚代六百五拾匁之直ニ而*持参ス、同第十二時頃帰ル、○午後第二時過、神田明神男坂下石坂周造[殿](註1)方々使来ル、石炭油を取、穴ヲ堀(註:誤字で掘のこと)候機械、先日相求候間、右ヲ写真致し呉候様頼ニ付、右使と一同ニ宮下右同氏へ行、機械見物致し、判之大小并紙数等承り候所、四ツ[立]判ニ而前後と両様写シ一包五枚ツ、有之候へ者先宜敷旨なり、且手札之人物も写しもらい度旨頼有之候ニ付、承知致し候、尤明朝可参段約束致し帰ル、然ル所明日ハ宅之休日ニ付、明後廿九日可参旨、竹造を以テ申越候所、先方ニ而承知之旨挨拶有之、○同第七時過姥子氏御出、茶・菓子出ス、同第八時頃御帰リ、○同第七時過銀次郎来ル、同第八時半頃御帰ル、○同第五時前事務局方左之通申来ル、

(註: *は一文字分空)

[博覧会事務局からの書簡および返信書簡書写]

御用有之候間、明廿八日朝第十字可罷出候也、

四月廿七日

右ニ付左之通請取遺ス、

御記

一、御用状 一封

右正奉受取候、以上、

年月日

御使衆中

○たか夜ニ入候而も不帰、」

註1: 石坂周造(天保3年1月1日(1832年2月2日)~ 明治36年(1903)5月22日)、幼名は源造、号は宗順(そうじゅん)。幕末の志士で、尊皇攘夷論者。清河八郎らと共に尊皇攘夷運動に荷担し、「虎尾の会」に参加する。

清河八郎が幕府を欺いて浪士組を結成した際には、それに参加。浪士組(後、新選組と新徴組の二つに分離)頭取の一人に就任して、文久3年(1863)3月、京都に入った。京都入ってから清河八郎らと尊皇活動を続けて、水戸藩出身の芹沢鴨や佐幕派の近藤勇らに反感を買う。石坂自身も上洛道中より近藤達と良い感情を抱いていなかったらしい。やがて京都から江戸へ帰還するよう命令が下ると、大半の浪士達を率いて江戸へ戻るが、幕府を欺いた罪により同年(1863)4月13日、幕臣・佐々木只三郎らに清河八郎は斬殺され(この時石坂は清河八郎の首と攘夷党への連盟状を奪い返している)、石坂もまた翌14日に下総国佐原で幕吏に包围されて、5年間投獄された。預かり先を転々としながら幕府瓦解を獄中で過ごし、慶応4年(1868)3月15日に、幕臣・山岡鉄舟の預かりの身となる。妻の桂子は高橋泥舟の妹で、桂子の姉・英子は鉄舟の妻という関係にあった。

その後赦免されて民間事業に取り組み、明治4年(1871)、東京に長野石炭油会社を設立。アメリカから輸入した綱掘り式掘削機で相良油田から石油を採集した。明治期には石油産業の祖として知られる。明治36年(1903)、死去。享年72。墓は鉄舟が建てた全生庵(東京都台東区谷中)の山岡鉄舟の墓の傍にある。

「四月廿八日 快晴

一、午前第八時過武助私用ニ而外出シ、同第十二時頃帰ル、昼飯食シ無程又外出シ午後(夜不帰)第 時頃帰ル、○午前第九時過宮下事務局へ行がけ石川や(屋)へ立寄、大判硝子五枚註文致し、事務局へ行候所、本月初回五拾円上納之節、松三郎昨年上[方]筋江御用之節之旅費六拾円余可被下分、右上納方へ差向候約束ニ取極置候所、外ニ右一同上京御用之人員へも[今]以而被下ニ不相成候間、過日申候義ハ不用ニ致し可申候、いづれ(ルビ: いづれ)一同へ被下候節、其方へも渡し可申候、其節上納可致旨、小野氏被仰聞候ニ付奉承知候段相答、午後第三時過帰ル、○午前第十時前大山使用ニ而外出シ、午後第十一時頃帰ル、○午前第十時頃与三郎使用ニ而外出シ、午後第四時頃帰ル、○たか午*第*時頃帰ル、○たか今日不帰、○宮下午後第五時過私用ニ而外出シ、同第十時前帰ル、○午後第四時前銀(註)地氏来ル、無程松蔵同道致し外出シ、松蔵今夜不帰、○たか午後第二時頃帰ル、」

(註: *は一文字分空)

(註: 銀はかねへんに刃;「銀」の異体字)

「五(ママ)

五月一日 晴

一、午前第九時頃松蔵、石坂氏へ石炭油を取穴ほり機械之写真に行、正午過帰ル、四ツ立判一枚・ハツ立判二枚、双眼二枚写取ル、○第十一時頃本郷壬申義塾を筑紫謙殿(註2)来り、塾中人員七拾[人]程有之候間、右人員を一枚之内へ写真致し度旨頼有之、尤七拾枚計入用之よし、且判之大小并価等問合候間数拾枚ニ候間、四ツ立判一枚ニ付二分二朱、六ツ立判二分、ハツ立一分二朱ニ而存可申旨挨拶致ス、無程帰ル、○午後第五時頃宮下、壬申義塾へ場所見分ニ行候所、兎角(ルビ: とかく)能き(ルビ: よき)場所無之候得共、幅五・六間、長九間と之平地有之候間、先其所ニ相定帰ル、尤明々後三日第十時頃より向ニ而写度旨、先方頼ニ付承知致ス、同第七時前帰ル、○同第六時頃斎藤鉄太郎(註3)殿来り、明朝方入塾致し度旨頼ニ付承知致ス、同第七時前帰ル、」

註2: 筑紫謙は佐賀県宮浦村出身の士族で始め明治7年(1877)7月23日に二等巡査となり、後に警視庁警視となった人。明治6年(1876)当時は本郷元町2丁目53番地にあった壬申義塾でドイツ語を学んでいたのである。その後も日記に登場している。壬申義塾は石川県貴族士族の大熊春吉(塾長)が明治5年(1872)2月に開校した独逸学塾(私立学校)で、ドイツ人のジークスタールがいた。大熊春吉は、天保11年(1840)3月7日加賀藩士の家に生まれ、最初オランダ医学を学び医官として勤務、さらに大阪理学校で英学・理化学を修めたのち、明治4年(1871)5月上京して司馬凌海のドイツ語塾春風社に入塾してドイツ語を学び始めた。しかし、その2か月後にはもう同社の助教としてドイツ語を教える上達ぶりであった。

註3: 斎藤鉄太郎は宇都宮県貴族士族、18歳の青年。南間孫一郎の親類で、明治6年4月3日の入門請状書写にも出てきた人。横山松三郎の写真館に入門を許されて門人となる。

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)